

G1菊花賞

<最終見解>

本命はドウレッツア。

2年前からG1がある度にずっと書いていますように、
ドウラメンテは、かつてディーブ産駒が得意だったレースを得意とする種牡馬。

そして、京都の菊花賞はディーブの直線スピードを発揮しやすい舞台。

改修前の京都で施行された2017～2020年の4回では
馬券になった12頭中8頭が父か母父ディーブインパクト。

2019年は父ディーブインパクトのワールドプレミアが1着、
サトノルークスが8番人気2着。

2020年は父ディーブインパクトのコントレイルが1着、
サトノフラッグが3着で母父ディーブインパクトのアリストテレスが2着。

そして、新装京都で行われた今年の天皇賞春も
ディーブ産駒のジャスティンパレスが優勝。

2着ディープボンドも父父がディープインパクト。
新装京都芝長距離 G1 は一層、ディープの輝きが増す一方。

また、ドゥラメンテ産駒が、ディープ直仔の空白を
占めていくのは、繁殖能力が単純に高いから。

ディープ直仔がない今年の3歳世代では、種牡馬能力も断然。
芝重賞でも産駒勝利数、上位種牡馬のなかでの勝率、回収率は断トツの首位。

勢いのあるディープ産駒を狙うのが
重賞の血統馬券の定石でしたが、ドゥラメンテも同じ。
最も上昇余地を残す馬が、最も優秀な種牡馬の産駒なのですから
素直に乗る手ではないでしょうか。

大外枠が多少嫌われているようですが、
外枠のために走れなかった人気馬はほぼいないため、
それで人気落ちるのもおいしいです。

相手本線はソールオリエンズ。

母系に欧州指向の伸びを強化するモチベーター。
タメればタメるほど伸びる血統が走りやすいレース。

条件はピッタリで崩れる可能性は低いです。

この2頭が本線なら、あとはサトノグランツまでしか買えません。

父はディープ系で菊花賞馬。母系も欧州型。

シンプルに菊花賞馬と欧州トップサイヤーの配合馬を
2, 3番手評価としました。